

があり、同じく第Ⅱ巻注(3)でも、「このような約束はどこにも明言されていない」とある(傍点筆者)。これだけの大冊を通じて、その件はどこにも出て来ないと、こともなげに明言できるというあたりにも、訳者の原著に対する〈思い入れ〉の深さをうかがうことができよう。ひるがえってわが地理学界の場合、古代に限らず近代地理学の〈古典〉についてさえ、アチラの地理学史の概説書や二次的文献によって安直にものを書くことがほとんどであり、本書に比肩できるような訳業は絶無だったといえるのではあるまいか。「あとがき」の「謝辞」の個所にも記されているように、織田先生が「解説」執筆の他にも、出版社の斡旋など、訳者にさまざまな応援をおしまれなかったのも、ついに地理学の教え子の中からは出現しそくない逸材との邂逅をよるこばれてのことであろうと思う。

そしてこれもまた、顧みてわが身を慨く類に属するのだが、古代そして15・16世紀において、地理学の保持していた権威のなんと偉大だったことだろう。それはプトレイオスの『地理学』が単なる知識の記載ではなく、「知的世界のシステムの中の要素であった」(増田義郎「大航海時代とプトレイオス」、前掲『プトレイオス世界図』所収)ことによるものであることを想起するとき、本書はわれわれに自省を促すことしきりである。(矢守一彦)

福田 徹著

### 『近世新田とその源流』

古今書院 1986年3月

A5版 311ページ 4,800円

本書は福田 徹の遺稿集である。故人の論文の中から、新田研究としての代表的な論文をとりあげて、この題名の著書にまとめたものである。遺稿を著書にまでまとめて刊行した人々は、小林健太郎・山田安彦・坂口慶治・笠原俊則の四君である。このしごととは故人に対して真摯なる愛情を捧げる人々でなければできないことではない。四君の福田 徹を悼み、彼の成果を学界に公刊した努力に対して、私も讃辞を惜まない。またこの著書に序文を寄せた谷岡武雄の門下生を惜む心情の切々たるものが心に暖く感じてくる。

そもそも遺稿集の刊行というものはむずかしいものである。ただ故人の論文を整理して並べて著書にするだけのことではない。一方には論文を書き残し

た故人の研究課題に対する「考え方と目的」が存在する。他方には故人の遺稿をまとめる人々の「考え方と目的」がある。後者の「考え方と目的」は前者の「考え方と目的」を充分にくみとって、これを第三者の読者が理解できるように編集しなければならないからである。ふつうの著書に対する書評とは異なり、遺稿集の著書に対する書評は、この二つの視点から論評されることが当然であろう。

本書は三部にまとめられている。第一部は近世新田の論文として三か所の事例論文があげられている。第一章は岩木山麓の近世開発、第二章は富士山麓南地域の開発、第三章は宇治市域の新田開発である。第二部は近世新田の地域展開として、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、伊勢国北部における新田の立地環境として典型的事例となっている新田開発を説述している。第三部は荘園および条里制の復原として、第一章から第四章まで、琵琶湖に注ぐ安曇川下流域の荘園と条里型水田地割を復原し、集落景観・地形環境・土地割・農業景観を説述している。

第一部の諸論文は福田 徹が立命館大学大学院修士課程を1963年に終了した時から、その後の10年間に発表した論文である。第二部は1977年から1984年まで、2～3年間隔で地方ごとに新田開発をまとめた論文であり、この間隔は調査期間を意味していると思われる。第三部の論文は1973年から1981年ころまでに発表したものであり、近世新田の源流を荘園・条里型水田に求めていく福田 徹の考え型が強まっていったことを推察させるものである。第一部の新田開発の三つの事例研究は、福田 徹が「近世新田の構造」——このテーマは編集者がつけたものであろう——という視点を主張しているかの如く、編集者がうけとめて表現したことは、故人の「方法と目的」について誤っているものではないと思われる。序文を寄せた谷岡武雄が新田の「立地環境の如何によってそのあり方が異なることに注目した」と指摘しているが、まさにその通りであり、新田そのものだけの解明にとどめず、新田をめぐる環境にまで検討している。第二部の各地方における新田の典型的事例を多く説述していくが、すべてこの観点において強調している。地方別の新田開発の検討は、東北地方から近畿地方までしか掲載されていないが、その他の中国・四国・九州地方については、これから検討して論文として発表する計画であったと思われる。

る。

本書に編集者が掲載しなかった論文が多数あるが、故人の「研究業績一覧」の中に三重県や滋賀県から北アメリカに移民した論文が三編発表している。これは1981年、1982年、1985年に発表している。この3編の論文は福田 徹の事例研究と地域展開の諸論文を次々と発表した後年の論文であることに注目して、福田 徹が主張しようとした新田論の「新構想」の内容をうかがい知るものが、ここにあったことを私は強く感得するものである。実は私は早くから福田 徹と新田研究についていろいろと何回となく話し合っている。拙著『新田開発』を公刊してから30年後に福田 徹が新田研究を開始したことに大なる期待を待ったからである。ことに福田 徹は内地留学をしたころ、千葉大学の山田安彦研究室を選び、ここで山田安彦の指導をうけながら、関東地方の新田を調査していた。この時に私は福田 徹と数時間にわたって会談した。まもなく福田 徹はアメリカに移民集落の調査に出かけた。この調査が福田 徹の新田研究の「新構想」を確実に確立したはずである。福田 徹は近世の新田、中世の荘園、古代の条里型水田と開発の性格のちがいをつかみ、さらに北米の移出民の集落開発はアメリカという国土・社会的条件の異なる土地において、過去から身につけていた日本人の開発様式がいかに変容するか、なにが変容せずにあるかをつきとめて、時代という環境、風土という環境のちがいの中にひそんでいる開発の本質がいかなるものであったかを主張しようとしたのであると想像する。これが福田 徹の新構想からなる新田研究であったと私は思うのである。

しかし、内地留学が終了して勤務校にかえったのち、1985年に「滋賀県における北米移民の空間分布」の論文を発表した。それからまったく忽然と急逝した。この電話を京都の友人から夜にうけて、私もまったく茫然とした。福田 徹が新構想の新田研究を発表しないでしまったことは残念であった。それ以上に、福田 徹その人を失ったことには痛恨極まるものがあつた。「近世新田とその源流」の中には福田 徹の新構想の論文は、いまだ発表していないから掲載されていない。あるいは遺稿集を編集した4人の先輩・親友や序文をよせた院生時代の指導教官は「なにか新構想が芽生えていた」ことを感じとっていたと思う。私は『近世の新田とその源流』を一読して、私が30年前に発行した『新田開発』と異なる

視点からみた著書が出現するという期待が消えさつたことを残念に思う。(菊地利夫)

佐藤博之・浅香勝輔著

『民営鉄道の歴史がある景観Ⅰ』

古今書院 1986年7月

A5判 216ページ 1,500円

従来歴史地理学においては、近代交通に対する関心はさほど高いとは言えず、鉄道開通ともなう交通路の変遷といったテーマが時たま取りあげられる程度にとどまっていたといえよう。

しかし、この数年、近世・近代の交通に対する再評価の気運が全般的に高まってきており、たとえば、地理学の分野においても、中川浩一氏の『地下鉄の文化史』1984、および『バスの文化史』1986、(ともに筑摩書房刊)といった成果をあげることができる。

日本大学理工学部教授の浅香勝輔氏も中川氏らと共に、交通の歴史地理学に深い関心を寄せてこられた一人であり、その結果が本書となって現われたといえよう。もう一人の著者である佐藤博之氏は、京阪電鉄の常任監査役であり、浅香研究室と佐藤氏との交流の中ではぐくまれた成果が本書に盛り込まれている。

さて、内容を簡単に紹介すると、

- I ずい道(近鉄生駒ずい道他)
- II 橋りょう(東武利根川橋りょう他)
- III 線路(名鉄枇杷島分岐他)
- IV 駅(南海浜寺公園他)
- V 施設(阪神尼崎の豊安室)
- VI 廃駅(東武旧・隅田公園駅他)
- VII 連絡線(小田急松田)
- VIII 築堤(京阪鴨川べり他)

の8章から成り、川勝南海電鉄会長と根津東武鉄道社長の序文が寄せられている。

各章の構成からもわかるように、大手私鉄沿線の様々な施設、設備、建造物等を取りあげ、その建設過程を通して、鉄道によって生み出された歴史的景観を探るとい手法がとられている。

文中には、地形図と写真が多用されることによって視覚的効果を高め、理解を促進している。また、大手私鉄各社の社史や社内資料が豊富に引用され、手がたい実証研究としての価値を高めている。とりわけ、印象深かったのは、京浜急行の旧・平沼駅の箇所である。